ウェルび～な通信　第８号 ～拡大版～

～ずっと海老名で暮らしたいプロジェクト～

第２回　海老名市自立支援協議会が開催されました

平成 29 年 10 月 17 日（火）に、今年度第 2 回目の自立支援協議会が、海老名市役所にて開催されました。冒頭、内野優市長よりご挨拶をいただきました。その後、「海老名をつなぐ自立支援協議会－ずっと海老名で暮らしたいプロジェクトの 10 周年－」と題したシンポジウムを開催しました。109 名の方にご参加いただきこれまでの活動を振り返りながら、現在地域で活躍をしている**達人**たちから地域づくりの現状についてお話をいただきました。

【講演】地域づくりと自立支援協議会
和泉短期大学教授　鈴木　敏彦氏

「自立支援協議会」は、福祉関係者以外の市民の方からすると、大変分かりにくい活動なのですが、鈴木先生は、ユーモアを交えながら、とても分かりやすくご説明をしていただきました。障がいがある人もない人も、ともに暮らしやすい共生社会を作っていく上で自立支援協議会が果たす役割がとても大きいこと、活動には地域差があるが、海老名市は関係者が協力し合いながら先進的な取り組みをしているとの評価をいただきました。鈴木先生のトーク力だけでなく、お人柄も伝わってくる講演でした。

シンポジウム「地域をつなぐ達人たち」

シンポジストのみなさん

達人No.1
学童保育 Anchor　松島　希氏

松島さんは、大谷地区で学童保育の運営をされています。その中で、地域の商店街の方や、タクシー会社の方たちとつながりながら、学童保育が地域の新たなコミュニティの場所になるよう、精力的に活動されています。自分たちが暮らす街に、愛着を持てるお子さんたちが、たくさん育っていくことを楽しみにしています。

達人No.2
手をつなぐ育成会　藤田　精子氏

障がいのある方への支援は、充実しつつあります。また、SNS などを利用して家族同士のつながりも増えていますが、一方、その輪の中に入れず、孤独感や疎外感を抱いている人も多いのではないかと考え、活動を始められました。支援の対象は、「障がいのある方だけではなく、その家族も対象なのではないか」というお言葉が印象的でした。

達人No.3
東柏ケ谷４丁目地区社協　浅黄　攻氏

ひとり暮らしの高齢者に食事提供をする「かがやき食堂」の設立の経過や、現在の状況についてご報告をいただきました。スタートしたばかりでご苦労も多いとのことでしたが、活動中の写真を拝見しご参加されている皆さんの笑顔が印象的でした。今後、活動がさらに充実していくことを期待しています。

熱気に包まれる会場

ご参加いただいた皆さま
ありがとうございました。

第 15 回
海老名市こころのバリアフリー2017

平成 29 年 12 月 23 日（土）に、第 15 回目となる海老名市こころのバリアフリー2017 が開催されます。毎年、実行委員会を立ち上げ、障がいのある方が地域の皆さんに正しく理解され、社会の一員として生活するとともに、安心できるまちづくり、心の健康づくりを目指し活動をしています。今年度は「あなたも大切、私も大切」を掲げて、講師に北澤豪氏、コーディネーターに岩室紳也氏を迎え講演会を開催します。詳細は以下のとおりとなっています。多くの皆さんのご参加をお待ちしています。

©馬場道浩

北澤　豪氏（講師）

サッカー元日本代表、公益財団法人日本サッカー協会理事、フットサル・ビーチサッカー委員長、一般社団法人日本障がい者サッカー連盟会長
社会貢献活動にも積極的に取り組み、サッカーを通じて世界の子ども達を支援できる環境作りを目指している。

岩室　紳也氏（コーディネーター）

ヘルスプロモーション推進センター（オフィスいわむろ）代表・医師。診療を続けながら、エイズ予防を含めた幅広い健康づくり活動に従事している。

日時：平成 29 年 12 月 23 日（土）
13 時～15 時 40 分
※販売・展示は、12 時～開始。
会場：海老名市文化会館　大ホール
※入場無料

内容：

講演会
「みんなが認め合う社会をめざして～障がい者サッカーから見た共生社会～」

アトラクション（演奏）
SAPLING MUSIC PARK EBINA

展示
障がい者団体・障がい福祉事業所の製品販売など

＜お申込み・問い合わせなど＞
- お申し込み方法や詳細は、市役所ホームページもしくは、障がい福祉課（TEL 046-235-4812）までお問い合わせください。
- 託児（2 歳～、要予約）や要約筆記、手話通訳もございます。
- ご来場の際は、公共交通機関をご利用ください。

飛び出せ!!　ウェルび～な通信　－障がい者雇用編－

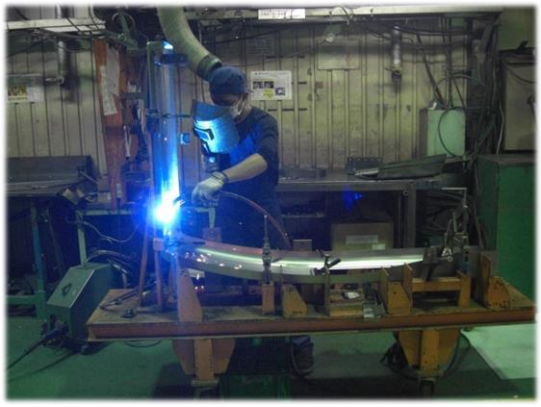
今回は、障がい者雇用の現状をお伝えするために、綾瀬市にある（株）栄和産業 様を取材させていただきました。きっかけは、取材先を検討していたところ、障害者就業・生活支援センター「ぽむ」さんより「障がい者雇用に積極的に取り組んでいる熱い社長さんがいらっしゃる」とうかがい、訪問をさせていただきました。伊藤正貴社長より、今後の障がい者雇用を推進していく上で、大変貴重なお話を伺いました。

会社概要

1974 年（昭和 49 年）設立。事業所は、綾瀬市内と沼津市に工場があり、従業員数は 133 名。業務内容は、板金・加工。自動車試作部品の製作や、リニアモーターカー開通に向けて活躍するトンネル掘削車のリアカバーの制作、鉱山などで活躍する大型ショベルカーのエンジンフードの制作など、建設機械の部品制作を行っています。

障がい者雇用を、はじめられたきっかけは？

もともと働いていた社員が大腸がんを患い、障害者手帳を取得し、障がい者雇用として働いてもらっていましたが、その方が退職。その後、精神障がいの方を採用しましたが、病状悪化のため 1 年で退職をされました。そこで、ハローワークへ相談したところ「ぽむ」さんを紹介され、その後、「ぽむ」さんの支援を受け、支援学校を卒業する学生を採用しました。



溶接作業の様子

採用にあたり、工夫された点はありますか？

採用前は、仕事にはチームワークが求められたり、機械操作を含め、一定のスキルがあるので、難しいかなと思っていましたが、一方では、新卒者同士で助け合うのではないか、という期待もしていました。仕事の内容については、実際に支援学校の先生に来てもらい、相談しながら決めていきました。生徒と先生の信頼関係の強さを感じました。

社員の方の不安などは、ありませんでしたか？

たしかに、当初はありましたが、採用を続けていく中で、明るくて、素直な方が多いことが分かり、現在では、そのような不安はありません。人間関係のつまづきは、障がいがあっても、なくても、変わらずあるものだと思っています。

採用後、会社に変化はありましたか？

最初に採用をした方が、働く喜びを素直に表現してくれました。そのことで、他の社員が初心に戻ることができました。また、現在、７つの支援学校から実習生を受け入れていますが、製造業でありながら、教育に携わることができることも、社員のモチベーションになっています。

採用時に求めるものは、何ですか？

実習の受け入れは、いつでも OK です。まずは、栄和産業で働きたいという気持ちを、しっかりと持っていること。その上で、礼儀や節度を備えていること、自己管理ができていること（休まないこと）を重視しています。これがあれば、どこの会社でも愛され、生きていけると思います。

板金作業の様子

障がい者の法定雇用率の引き上げに、どのように対応されますか？

企業によっては、納付金で対処するという考え方もあると思います。しかし、「ぽむ」さんや支援学校との出会いをきっかけに、障がいのある方が、社会や地域で共に生きる場を、もっと増やしていきたい気持ちがあります。製造業は、コスト面において、海外生産やオートメーション化（ロボット化）が進んでいきますが、障がい者に出来ることは、まだまだあると思うので、今後も仕事を増やしていきたいと思います。

企業として、赤字を出すことは許されませんので、新しく採用したら、その分、利益が出るよう仕事を創出するモチベーションにもなります。助成金がもらえる２年間で、一人前の仕事ができるように育てることができれば、障がい者雇用という概念がなくなると思っています。

障がい者雇用の課題は、どのようことだと思いますか？

まずは、企業側に障がいのある方を支援する機関の情報が届いていないことがあると思います。障がい者雇用に興味のある企業は、たくさんあると思いますので、企業と支援機関がつながっていないことが課題だと感じています。そのため、会社のホームページで、マッチングや実習受け入れの依頼などを行っています。（http://www.eiwa-sangyou.co.jp/）

また、神奈川県には、ロボット産業特区があり、今後、ロボット化が進むことで、作業の効率化や人件費の抑制などにつながっていくと思いますが、反面、支援学校の生徒の仕事を奪っていくことにもつながるのではないかと思っています。

さらに、補助金を支給する仕組みも工夫できると思っています。障がいが重度の方で、最低賃金を支払う労働力が足りない方に、補助金を支給する仕組みにすれば、「労働力+補助金＝最低賃金以上の給料」になると思っています。

取材後記　～スタッフ感想～

強く印象に残っているのは、伊藤社長がおっしゃっていた「製造業でも教育に携われるんだ」という言葉です。多くの支援学校から実習を受け入れ、実習を通して自信をつけ成長していく生徒の姿を見て感じたことだとのことでした。また、障がい者雇用の大部分が知的障がい者であり、重度の方（A2）も採用されているとのこと。仕事も限られる中、名刺づくりや網戸張りなど、新しく事業部を立ち上げ、最低賃金分の仕事をしてもらうための環境を作っていくという、行動力に感服しました。

今回の取材では伊藤社長から貴重なお話をたくさん聞かせていただきましたが、伊藤社長の「障がい者雇用」を特別なこととして捉えない姿勢を感じることができたように思います。

「障がい者だから」雇用するのではなく、会社に「入りたい」という思いを大事にしたい、「ここ（この会社）で働けることの喜び」を尊重したいという、健常者・障がい者の区別なく、その人自身の思いを大切にしている会社だと感じました。今回の取材をとおして学んだことを、利用者の皆さまに、しっかりと伝えていこうと思いました。

今回の取材では、工場内の見学もさせていただきました。その際、社員のみなさまが、全員、作業の手を止めて、しっかりと挨拶をしていただきました。障がい者雇用という視点で、取材をさせていただきましたが、それ以外の栄和産業さんの社風のようなものを感じました。また、伊藤社長のお話からは、障がいのある、なしに関わらず「社員を育てる・理解する」という気持ちが伝わってきました。

取材にご協力をいただきました、伊藤社長はじめ社員の皆さま、「ぽむ」の坂本所長に、深く感謝申し上げます。

伊藤社長、企画部の荒巻主任、伊田さん、
取材にご協力いただき、ありがとうございました。